

### 3 内痔核に対する ICG 併用半導体レーザー治療の経験

島村 公年・島村 栄員

しまむらクリニック

インドシアニンググリーン (ICG) を内痔核に注入し、低出力の半導体レーザーで凝固する新しい非観血的治療法を 16 例に施行した。ICG は半導体レーザー光の吸収を増強し、かつ深部への進行を遮断する。対象は脱出または出血が主訴の 2 度ないし 3 度の内痔核で、手術は原則として腰椎麻酔で行った。照射部位は 2.8 カ所 (以下平均)、手術時間 18.8 分、入院期間 3.1 日、術後経過期間は 11.6 ヶ月であった。術後の疼痛は軽度で多くは自制内であった。出血は少量で無処置あるいはビスマス系座薬で止血した。脱出は半数例が術直後に、残りは 1～2 ヶ月かけ徐々に消失し、1 例のみ残存した。再脱出はなかった。本治療に対し、11 例が満足、4 例がまあまあ満足、1 例が不満と評価した。

### 4 ICG 併用半導体レーザー療法を用いた痔核の day surgery

杉本不二雄

杉本医院 (消化器科, 外科, 内科, 肛門科)

ICG 併用半導体レーザー療法は 805nm の単一波長半導体レーザーと 805nm が最大吸収波長である ICG を併用し、内痔核を切除せず縮小させる方法である。2002 年 4 月から 2003 年 11 月の 1 年 8 ヶ月間に、64 例の痔核手術を day surgery で行い、内 62 例に半導体レーザーを使用した。

内訳は、レーザー単独が 20 例、レーザーと結紮切除術 (LE) が 25 例、レーザーと痔核、裂肛手術が 14 例であった。レーザー単独例では LE との併用例に比して、術後疼痛、職場復帰、創治癒期間において優れていた。レーザー療法の合併症は、後出血が 1 例、外痔核の遷延性浮腫が 1 例であった。

本療法は、痔核の程度に応じてレーザー単独または、LE とレーザーの併用で使用することで、LE の数を減らし、術後疼痛の軽減、出血リスク低

下を期待できる点で有用である。

### 5 当科における痔核・脱肛に対する PPH 症例について

酒井 靖夫・番場 竹生・本間 英之

武者 信行・坪野 俊広・相場 哲朗

川口 正樹

済生会新潟第二病院外科

当科では PPH を 2000 年 8 月から導入し、20 例に行った。男：女 = 15 : 5、年齢 27～79 歳である。内訳は内痔核・脱肛 18、ホワイトヘッド肛門 1、不完全直腸脱 1 で、Golig her 分類ではⅡ度 1、Ⅲ度 6、Ⅳ度 13 例であった。13 例に外痔核やスキントグ、肛門ポリープなどの併存病変を認めた。術式は PPH 単独 13、PPH + 付加手術 7 で、併存病変に L&E ポリープなどを必要に応じて付加し、痔動脈結紮を 9 例に行った。術後合併症は後出血 1、有痛性外痔核 2、晩期部分粘膜脱再発 1、麻痺性イレウス 1 であった。術入院期間は平均 7.6 日で、PPH のみでは多くは 5 日以内に退院できたが、付加手術すると通常手術と同様であった。再発は 1 例 (5%) で L&E し、縫合部狭窄例はなく、全例脱肛は消失し、痔核の縮小が得られた。

【まとめ】 PPH は痔核の発生機序に則った合理的な術式であり、術後疼痛は従来法より軽微であり、入院期間も短くでき、患者の満足度は高い。

### 6 当科における PPH の現況

岩谷 昭・松尾 仁之・小林 孝

新潟臨港総合病院外科

PPH と結紮切除 (LE) とを比較検討した。2001 年 1 月より 2003 年 10 月の間で、Ⅲ度以上の痔核手術症例 266 例を対象とした。PPH 154 例、LE 112 例、手術時間は平均で PPH 27 分、LE 39 分と有意に PPH が短かった。鎮痛薬投与期間は有意に PPH が短かった。入院日数は平均で PPH 5 日、LE 12 日と有意に PPH が短かった。退院後疼痛を訴えたものは PPH 7%、LE 18% で有意に PPH が少なかった。術後出血、狭窄に有意差はな

く、脱出感が続いたものは PPH 15%, LE 4%と有意に PPH に多くみられたが、軽微なものが多かった。高度の脱出がみられた PPH 3 例は結紮切除で再手術を施行した。直腸腫瘍を 1 例経験したが、3 週間後に自然閉鎖した。PPH は術後疼痛が軽く創処置も不要で、早期退院可能な良好な術式だが、術後愁訴が残る患者も少数認められ、術式の適応を慎重に判断することも必要と思われた。

## II. 特別講演

「肛門疾患の新しい治療 — 主として PPH —」

東葛辻仲病院院長

辻 仲 康 伸

### 第 53 回新潟大腸肛門病研究会

日 時 平成 16 年 6 月 12 日 (土)  
午後 3 時～5 時 30 分  
会 場 新潟東急イン  
3 階 華の間

#### I. 一般演題

##### 1 下部消化管穿孔に対する手術症例の検討

池田 義之・香山 誠司・津野 吉裕  
興梠 建郎

水原郷病院外科

大腸穿孔例（虫垂穿孔例を除く）24 例（男 17 例，女 7 例，平均年齢 67.9 歳）を対象に，その臨床病理学的背景，及び予後につき検討した。術後 30 日以内の死亡例を直接死亡例とし，大腸穿孔を生存例と直接死亡例に分けて比較検討した。穿孔原因は憩室 9 例，次いで癌 7 例で，穿孔部位は左

側結腸（S 状結腸，直腸）が 17 例と多く，直接死亡例はすべて左側結腸穿孔例であった。直接死亡例と生存症例との間で，Base Excess と平均血圧に有意差を認め，直接死亡例は男性に多く，白血球数減少例，遊離穿孔例が多い傾向を認めた。大腸癌穿孔例では，治癒切除例に長期生存例を認めた。重症度の推定に血圧低下や Base Excess の低下が有用である可能性がある。また大腸癌穿孔例で治癒切除を施行し得ることにより長期予後の改善が期待できる。

##### 2 下行結腸癌の診断に先行した臍腫瘍（Sister Mary Joseph's nodule）の 1 例

森岡 伸浩・宮下 薫・藍澤喜久雄  
奥村 直樹・清永 英利・西倉 健\*

燕労災病院外科

新潟大学大学院医歯学総合研究科  
分子・病態病理学分野\*

内臓悪性腫瘍の臍転移は Sister Mary Joseph's nodule として知られており，予後不良の徴候であるが，その頻度は非常に少ない。今回我々は，下行結腸癌の診断に先行した臍腫瘍の 1 例を経験した。

症例は 77 歳女性。臍腫瘍に気づき近医受診。精査目的に当科紹介した。当科での臍腫瘍生検で腺癌の診断であった。精査の結果下行結腸癌が確認され開腹術を施行。開腹すると腹膜播腫を認めたが肝転移は認めなかった。臍腫瘍より浸出液を認めたこと大腸の通過障害が発生していたことより，臍切除と下行結腸切除術を施行した。現在外来で化学療法を施行中である。